

挨拶

湊屋 稔

羅臼岳山頂の雪が、バラ色に染まりはじめると根室海峡を挟んで対岸に横たわる国後島から朝日が昇ります。立春が近づくと、かわたれ時の薄明が長くなります。

海に生きる人々の多い羅臼の住民は、みな夜明けの早まりに季節の移ろいを感じます。

季節は何千年も前から約束を違えずに巡りますが、魚類の回遊は、もっと短い周期で変動します。江戸時代から戦後にかけて北海道では、膨大な量のニシンが獲れていました。羅臼も例外ではありません。ニシンが獲れなくなると羅臼は、スケトウダラ漁で沸き立ちました。スケトウダラが獲れなくなるとスルメイカの大漁が続きました。

魚種の変動は昔から知られており、海流や海水温など自然環境の変動がその主な原因だとされています。同時に、近年では人間の活動による気候変動と乱獲が主な原因だと指摘されています。

いずれにしても現在、漁獲量の低迷が羅臼町を直撃しています。農地のほとんど無い羅臼町では、唯一の基幹産業が漁業だと言えます。漁業の不振は、町の経済を強く揺るがす危機です。町の存立そのものが脅かされる事態だと言えましょう。

平成 28 年 10 月 25 日（火）羅臼町役場において「立教大学 ESD 研究所と北海道目梨郡羅臼町 ESD 研究連携協定調印式」が執り行われました。翌平成 29 年 2 月、立教大学で開催された ESD 研究所と三自治体会議には町の企画振興課や教育委員会から 3 名の職員を派遣しました。この会議では、同じ覚書を交わしている長崎県対馬市、静岡県西伊豆町の皆さんと交流できました。さらに ESD 研究所に所属する大学の諸先生方との交流機会もあり、出席した職員は多くの示唆を得て帰町しました。例えば、学校教育の「知床学」の内容の発展と充実は、この会議が契機になったと聞いております。

また、同年 6 月には、阿部先生を始め ESD 研究所の先生方、対馬市、西伊豆町の皆様も羅臼町にお越しください、情報交換会を開くことができました。これには当町役場の職員も多数参加し、ESD と地域創生についての理解を深めることができました。

また、8 月には阿部先生の研究室の学生さんたちがゼミ合宿で来町され、知床での生活を体験してもらいました。この時は、町内の小学校や高校を訪問を通して町の子もたちとの貴重な交流機会を作って頂きました。

さらに 11 月に立教大学で開かれた国際シンポジウムに教育委員会の職員 1 名を参加させて頂き、インド、台湾、韓国、ノルウェー、イギリス、ドイツなど海外の地域創生の事例や長野県泰阜村、対馬市の事例など豊富な情報を得たと聞いております。

羅臼町の地域創生はまだその緒に就いたばかりです。今は、私たちの抱く展望を役場職員、議員、住民との間で広く共有を図りたいところですが、悠長に構えている時間的余裕は無く、共有を図りながら行動に移さなければなりません。

これまでの賜ったご指導にあらためて感謝申し上げますとともに、引き続き羅臼町の持続的発展のためにご助力頂けますようお願いしてご挨拶といたします。

(みなとや・みのる 北海道目梨郡羅臼町長)